

Title	書評：塩原良和著『分断と対話の社会学： グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会、2017年
Sub Title	
Author	津田, 正太郎(Tsuda, Shōtarō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.112- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

塩原良和著『分断と対話の社会学——グローバル社会を生きるための想像力』

慶應義塾大学出版会、2017 年

津田 正太郎

今から 20 年ほど前、本書『分断と対話の社会学』の著者である塩原氏と私がともに慶應義塾大学大学院の学生だったころの話である。当時、社会学の分野ではグローバリゼーションという現象が注目を集めるようになっていた。ヒト、カネ、モノ、情報が国境を越えて移動するようになり、さまざまな現象や問題を引き起こすとされた。そこには、国民国家体制を越える新たな世界秩序への期待もいくぶんかは込められていたのではないかと思う。

しかし、グローバリゼーションによって国境をはじめとする様々な境界が突き崩されるという予想に反し、世界を見渡せば多くの場所で「壁」を作り、境界線を補強しようとする動きが見られる。ドナルド・トランプが米国とメキシコとの国境に壁を建設することを公約として掲げ、米国の大統領選挙に勝利したのは周知の通りだが、それは数多くある事例の一つに過ぎない。1991 年の東西冷戦終結時には 12 にまで減少していた人びとを隔てる壁は、その 20 年後に 3 倍以上に増加したという指摘も行われている (Vallet 2014: 2)。

もっとも、それはグローバリゼーションにかんする言説が全て誤っていたということの意味しない。むしろ、国境を越えるヒト、カネ、モノ、情報の動きが活発化したからこそ、境界線をはっきりさせたいという願望がより強くなってきたと考えるべきだろう (バウマン 1990=1993: 237-238)。前置きが長くなったが、本書は、このようにグローバリゼーションと人びとのあいだの分断とが同時並行的に生じる現代社会の様相を理解するうえで恰好の入門書である。

大まかに本書の概要を紹介しておく、第 1 章において時代や国籍、文化、民族、階層などが異なる他者を想像するとともに、自分自身の社会のあり方を批判的に見つめ直すための「批判的想像力」の重要性が論じられる。本書の副題にもなっているこの「想像力」は、本書の鍵となる概念である。

第 2 章ではグローバリゼーションを理解するためのメタファーとして「流れ」「渦」「沈殿物」といった言葉が解説される。第 3 章ではグローバリゼーションの重要な特徴としての「移動」がもたらす社会的な含意について論じられる。第 4 章では「批判的想像力」の実践例として、オーストラリアのウーメラという立ち入り制限区域とそこを聖地とする先住民アボリジニの人びとが、現代日本に生きる「われわれ」とどのように結びついているのかが述べられている。

第 5 章および第 6 章では、マクロな視点からグローバルな資本主義がもたらす「速度」にか

んする考察や、大規模な天災や災害を利用して強引な開発を推し進める「惨事便乗型資本主義」についての問題提起がなされる。第7章および第8章ではナショナリズムの問題が取り上げられ、学説史的な整理や、グローバリゼーションが引き起こすパラノイア的な形態のナショナリズムについての解説が行われている。

第9章では、現代社会が多くの人びとを「傷つきやすく」する一方、そのことがマイノリティにたいするヘイトスピーチやレイシズムと結びつく可能性が示唆される。第10章では断然に対抗するための概念もしくは方法論としての共生／共棲と対話が論じられ、戦略的な観点からの対話にかんする考察が本書の結びとされている。

全体として、現代社会を理解するうえで重要な概念や発想が数多く紹介される一方、筆者自身の主張も巧みに織り込まれており、初学者のみならず研究者が読んでも学ぶ点がいくつもあのではないかと思われる。私も本書を読みながら、議論の組み立て方に何度も唸らされたことをまずは言っておかねばならない。

ただその一方で、第9章のヘイトスピーチにかんする議論において、本書の構成に起因する問題がわずかに露呈しているようにも思える。これまで見てきたように、本書はグローバリゼーションというマクロな現象を土台として、現代社会のさまざまな問題を論じるという構成になっている。そのため、ヘイトスピーチやレイシズムの蔓延にかんしてもグローバリゼーションとの関連性が指摘される形となっている（グローバリゼーション→「傷つきやすさ」の増大→マジョリティが逆差別されているという感覚の蔓延）。

しかし、この点を重視しすぎるなら、「近代化の敗者がレイシズムや排外主義に走る」という通俗的な理解へと接近してしまう。本書でも取り上げられている樋口直人の議論によれば、それらの現象の発生において重要なのは「政治的なイデオロギー」であり、「敗者」とは言い難い人びとが排外主義運動の主体となっているという（樋口 2014: 64）。

さらに、ヘイトスピーチやレイシズムには、近年の社会変動に還元できない側面がある。本書でも取り上げられている在日コリアンにたいする差別にかんして言えば、インターネットの登場と普及、日韓交流の増大によって後押しされている部分は否定できないにせよ、そのずっと以前から日本社会の基底的な部分で根強く再生産されてきた。グローバリゼーションの影響を強調しすぎることによって、差別のそういった側面が不可視化されてしまうのはやはり問題であろう。

さらにもう一つ、筆者である塩原氏と私との見解の類似点と相違点について論じたい。それにあたって、少し個人的な話をすることをお許しいただきたい。

この書評の冒頭で述べたように、1990年代後半に塩原氏と私は慶應義塾大学大学院に在籍していた。のみならず、私は、塩原氏の指導教員であった関根政美先生のゼミにお邪魔させていただいていた。関根先生のゼミにはナショナリズムやエスニシティにかんする研究を行う大学院生が数多く所属しており、マスコミュニケーション論を専攻する私にとって多くを学ぶ機会となった。

しかし、当時の私にはどうしても理解しづらいことがあった。それは「どのようなモチベーションでマイノリティにかんする研究を行うのか」ということである。もちろんそれは、個々の研究者によって異なる事柄ではある。だが、慶應義塾という場において、マイノリティについて論じることにある種の「後ろめたさ」をどうしても感じざるをえなかった。そこには、労働者階級による文化的な抵抗を論じていたはずのカルチュラル・スタディーズが、日本に輸入された直後には東京大学がその中心になってしまったことと通底する問題があったと言えるかもしれない。

これは邪推かもしれないのだが、本書において「批判的想像力」が鍵概念になっていることから、塩原氏にも同様の問題意識があったのではないかと私は考える。本書のもとになったのは、慶應義塾大学法学部政治学科の講義ノートだという。慶應であっても学生のバックグラウンドは多様であり一概には言えないが、その多くが富裕なマジョリティであることは否定しがたい。彼ら、彼女らの多くにとって、貧困や差別される経験はどこか遠い世界の問題である。だからこそ想像力がどうしても必要になる。縁もゆかりもない人びとが抱える問題が、実は自分たち自身の生活と関係していることを理解するための想像力、それはただ「かわいそうな人たち」に同情すれば良いという安易なものではない。この点で、本書の以下の指摘はきわめて啓発的である。

「あなたの痛み、私にもわかる」というマジョリティの側からの共感の表明が、マイノリティ側からの「あなたに何がわかるのか」という拒絶にしばしば直面する…。そんなとき、マジョリティの人々はマイノリティの人々の「傷つきやすさ」をわかったつもりになっているが、実は他者という鏡に映った自分自身の「傷つきやすさ」を眺めているにすぎない。ようするにそれは、マイノリティの境遇に同情する「善意の」マジョリティが陥りがちな「勘違いの共感」なのである。(本書: 167)

手前味噌ではあるが、私が 2016 年に上梓した『ナショナルリズムとマスメディア』においてキーワードの一つにしたのが、上記の引用文でも用いられている「共感」である(津田 2016)。自身にとって身近な問題とは言い難い貧困や差別される経験を、いかにして自らの問題として引き受けるべきか。そのための方法として、同書で私は共感について論じた。塩原氏も強調しているように、あるべき共感とはその対象と一体化することではない。他者と完全に同じ場所に立つことは決してできないし、立ったという思い込みはむしろ傲慢さを生む。それでもなお、他者の痛みについて想像し、そこから自身のあり方を見つめ直すこと、それが重要だという点において、塩原氏と私はおそらくきわめて近い立場にあると言ってよい。

ただし、そこから先が塩原氏と私とを分かち点である。上述のような共感は、かなり負担が大きい心理作用である。マジョリティがマイノリティの声に耳を傾けるということは、自身が無自覚的に抱え込んでいる差別意識を発見し、それまで享受してきた構造的な利益を認識する

という過程にほかならない。だからこそ、差別や抑圧を告発するマイノリティの声には、様々な嫌がらせや抑圧によってそれを封じ込めようとする強力な社会的作用が働くのだ。

加えて言えば、マジョリティからの共感など必要ないという立場もある。マイノリティによる異議申し立てとは言わば闘争なのであって、マジョリティの「同情」など必要ないという声はマイノリティ自身からも上がることもある。そうした立場に依拠するならば、本書や私の著作の存在意義はほぼ消失する。われわれにできることと言えば、自身の特権的な立場を守るために汲々としてすることだけなのかもしれない。

それでもなおマイノリティに共感し続けるという動機づけはいかにして可能になるのか。私はそのための基盤として「リベラル・ナショナリズム」の立場を消極的ながらも採用した。縁もゆかりもないマイノリティが「かわいそう」だから共感するのではない。そうではなく、自分と同じ社会を構成するメンバーの名誉や尊厳、生活が脅かされているからこそ、その痛みをほんの少しでも理解したいと思う。それは、私や私の子どもたちがこれからも生きていくであろう日本を、より公正で（可能な限り）差別のない社会にしていきたいという素朴なナショナリズムである。言い換えるならば、他の誰でもなく「私」のために差別や貧困と向き合うための動機づけをそこから調達しているのである。対して、塩原氏はリベラル・ナショナリズムが文化的同化を促進する、「国民であること」を強要する、自国中心主義的な発想を強化するといった理由に基づき、批判的な立場をとっていると思われる。

無論、私もリベラル・ナショナリズムが共感のための唯一の基盤だとは思わない。共感のための動機づけをどこから得るべきかという問いは、塩原氏が批判する「対案」の要求にあたるのかもしれない。だが、他者と自己とのあいだに何らの共通性も存在することを認めたくないという「同質性嫌悪」が蔓延するなかにあつて（ハージ 2003=2008: 225）、言い換えるなら他者への共感そのものを拒絶する姿勢が広がるなかで、この問題を考えていくことはやはり必要な作業ではないかと私は思うのである。

【文献】

- 津田正太郎 (2016) 『ナショナリズムとマスメディア 連帯と排除の相克』 勁草書房。
 バウマン、Z.、奥井智之訳 (1990=1993) 『社会学の考え方——日常生活の成り立ちを探る』 HBJ 出版局。
 ハージ、G.、塩原良和訳 (2003=2008) 『希望の分配メカニズム——パラノイア・ナショナリズム批判』 御茶の水書房。
 樋口直人 (2014) 『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』 名古屋大学出版会。
 Vallet, E. (2014) 'Introduction,' in Vallet, E. (ed.) *Borders, Fences and Walls: State of Insecurity?*, Ashgate.

(つだ しょうたろう 法政大学)